
侵略！（されそう）イカ息子

工口郷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

侵略！（されそう）イカ息子

【Nコード】

N8106R

【作者名】

工口郷

【あらすじ】

アニメ「侵略！イカ娘」のファンで、げそ。

(前書き)

大意はございません。怒らないで下さい。

ただ、アニメの”侵略！イカ娘”が大好きなだけです。
全てフィクションでゲソ。

「我々はこの干潟を守る為に来たでデソー！」
突然と現れた一人の少年が、そう叫んだ！

日中の満潮時には青くきらきらと光る遠浅の海も、夕方の干潮時になると、姿を現した海底と夕日に染まった水面が幾重もの島模様を描き出す。

ここは、都会からもそれ程遠くない広大な干潟。

様々な海の生物が代々住み続けたふるさと。

渡り鳥が餌を啄ばみ、人間達もその恩恵に与^{あずか}って来た。

その干潟も、今や1／3が大型重機により埋め尽くされようとしている。

海の生物も、鳥も、地元の住民も、その無慈悲な行動に抗おうと抵抗はしたのであったが、それも空しい結果と終わってしまった。

だが、そんな時だった。それを見かねた沖合に住むある一族が反旗を翻したのだった。

それが、

”半イカ人間族”である。

「私はこの干潟の未来を守りに来たでデソ。お前たちは直ちに此処から撤退するでデソ！」

この”デソデソ”言いながら、埋め立て中の最先端に立ちほだか

る小さな影は、一人の、いや一杯の・・・。

「私はイカ息子でデソ、我々イカ族はラムサール条約に賛同することを表明するでデソ。お前たちのすきにはさせないでデソ！」

白いTシャツに、白い短パン姿。見た目は小学5～6年生の男の子と変わらないのだが、唯一大きく違う部分がある。

それは、頭の上にイカ耳型の帽子の様なものを乗せ、そこからのれんの様に10本の触手が宙をさ迷っていることである。ただ、これは帽子ではなく、実際は体の一部なのである。

最初に現れたイカ息子がそう叫ぶと、それに続き、同じ姿の生物が埋め立て中の干潟の沖合に、横一線に立ち並ぶ。

彼らはじりじりと前方に進み、埋め立てに使う重機の行く手を遮る。はずであつたのだが、

「どけどけ、危ないぞーガキどもー！」

彼らの存在は余りにも小さかった。

重機を操る作業員はそう一言掛けるだけで、彼らの存在を全く無視し、大型の重機は爆音を上げ、沖合に向け土砂を押し広げて行くのだった。

それに、

ドボ、ドボ・・・。

イカ息子達はその土砂に押し出される様に、潮の満ち初めた浅い海へと逃げ込む。

「ウホー、危ない！何するでデソ」

ブルドーザーは干潟に土砂を押し出すと、再び後ろ向きに戻って

行く。

その隙に、イカ息子達は再び埋立地の先端に勇ましく飛び乗った。

「よし、怒ったでデソ」

夕日が彼らの後押しをする様に、雲の合間から彼らの背に向けて赤い光を放つ。精悍な少年たちのシルエットが横一列に浮かびあがる。

ここからが彼らの見せ場であった。

だが、その日二度とブルドーザーが攻めて来ることはなかった。

「どうしたでデソ？」

その日の仕事が終わったのだった。

しかし、翌朝からは、イカ息子達と重機との間で、残された干潟の水際を争う攻防が始まった。

一見、巨大な重機に対して、生身のイカ息子達は余りにも無力に見えた。

だが、彼らもただ単に声を張り上げているだけではなかったのだ。攻撃の手段があったのだ。

「みんな、飛ばすでデソ！」

イカ息子の掛け声に合わせて、彼らは巨大な重機を目掛け、一斉に攻撃を開始したのだ。

「うわ、イカスミを吐きやがった」

激しい液体攻撃に、思わず作業員達も顔を覆い、目を閉じてしま

大量のイカスミが、重機を目掛けて吐き出されたのだ。

イカスミの攻撃は十数秒の間、激しく続いたのだった。

彼らの一斉攻撃が一段落したところで、作業員達はイカスミで黒く汚れた衣服を想像し、暗い気持ちで目を開けた。

すると、何んとそれは真っ黒なイカスミでは無いではないか。

「何だ、修正液か？」

イカ息子達が吐いた液体の色は、真っ黒では無かった。

真っ黒どころか、真白だったのだ。

作業員のTシャツは、漂白剤で染めた様に白く輝いている。

それに、作業員達は安堵の表情を浮かべ、笑顔さえみせたのであった。

だが・・・。

「うわ、何だ？この感触。気色悪い・・・」

その手触りに作業員達は苦渋の顔に変わっていく。

さらにその臭いに問題があった。

一応、一定の理解を示せる臭いではあるのだが、何故か親しみが湧いて来ない。むしろ生理的には嫌悪感さえ覚えてしまう。

「見たか、我々はイカ娘ちゃんのように高速で触手を伸び縮みさせることは出来ないが、イカちゃんには出来ない”もの”を出すことが出来るのだ！」

これこそが、彼らイカ息子達の最大の武器。白イカスミ攻撃であ

る。

彼等は白黒両方のイカスミを吐くことが出来るのだ！

勝ち誇った様にイカ息子が叫ぶ。

しかし、その攻撃は確かに気分的には嫌な物であり、一瞬の作業の停止にはなったのであるが、ほとんど作業員達の仕事の妨げになることはなかった。

今日も、イカ息子達はあっけなく重機の圧力の元に海へと追い返されてしまう。

「うそー、全然効かないでデソ」

そんな攻防が始まって一か月が経った。埋め立ては干潟の半分近くに及んでいる。

一見、イカ息子達の努力も全く無意味に見えていたのだが、毎日稼働する重機の数に日に少なくなっていく。

埋め立てていく速度もそれに合わせて遅くなっていった。

それは、作業に出向く作業員達の数が次第に減って来ているからであった。

それもそのはずである。埋立地には、5分と居られない吐き気を催す悪臭が満ちているのである。

原因はイカ息子達が放った修正液の様な液体が、時間が経つに連れ大気に触れることにより、悪臭と化していった為である。

それに耐えられなくなった作業員達が、続々と体調を壊し仕事を休み始めたのである。

そして、その噂がみるみる間に広がり、新たな従業員を募集をしても職不足が続く状況下にも関わらず全く人が集まらないのである。残っている作業員達は鼻詰まりしている者か、臭いに対して免疫のある者達だけである。

「どうだ、我々の・・・ゴホゴホ、実力を見たか！デソ」
イカ息子が叫ぶ。

しかし、この成果の現れた事に対するイカ息子の言葉にも一応の歓声は上がるのだが、彼らにも覇気が見られない。

彼らの疲労もピークに達しているのだ。頬はげつそりとコケ、背筋は老人の様に丸まり、眼は虚ろだ。

それでも、彼等はここが踏ん張り時と前を見据える。

一方埋め立て地で働く作業員も、業務命令には背けない。工期も押している。

自分達も生活が掛かっているのだ。マスクを装着しているので声こそ聞こえてはこないが、心に秘めた思いでは負けてはいない。

そして、争いは更に続いた。

・・・そんなある日。

雲が足早に流れ今にも雨が降りそうな中、数十メートルの距離を隔て、両者が対峙する。

もう、何度こんな場面を繰り返したことか・・・。

一方は、イカ息子を中心に海際に横一列に並び、ふらふらの”半イカ人族”だ。

かたや一方の陸地側には、横一列に埋め立て工事の重機が並ぶ。ただ、実際に従業員が運転している数は、僅かに4台だ。

両者には、火花を散らす元気もない。

そこには気持ちだけであつた。

互いの正義の元に争う両者にとって、長期戦は余りにも不幸であつた。

このドロドロと、臭々《くさぐさ》とした争いはどこまで続くのか……。

……そう思われた時である。
そこに、一人の人間が現れた。

その人は、汚れ一つ付いていない紺色のおニユーの作業服を見事に着こなし、重機の間を割ってイカ息子達に向い、ゆっくりと歩を進めるのである。

その凜とした姿に、その場の全員が飲みこまれて行く。

最後に残った4人の従業員が腰を折り、その人に挨拶をする。
普通の挨拶にしては、少し腰が低い。

「あれは、誰でデソか？」

イカ息子もやっと、口を開く事に気が付いた。

まだ、その人間との間には距離がある為、表情までは伺えない。
だが、敵であることは間違いない。

それに、醸しだすオーラーといい、従業員の様子からも、かなりのお偉さんであることが伺える。

ここで、気圧されてはいけない。

ここまで来て負ける訳にはいかない……。

そう思ったイカ息子は、

「よし、最後の力を振り絞るでデソ。みんな”行く”デソ」

彼らは、イカ息子を先頭にして、そのお偉さんに向かって走り出す。

その姿は、気持ちに反して歩くよりも遅い。

若干前に出たところで、

「止まるでデソ！ 相手は、きっと大将でデソ、これ以上近づくのは危険でデソ。ここから、攻撃するでデソ。いくデソ」

イカ息子達はお偉さんに向って、白いイカスミを吐き掛けた。

中には、粉しか出ない者もいる。だが、相手は恐らく大将である。みんなは最後の踏ん張り時と頑張った。

その成果が現れ始める。

その人間の体が白いイカスミに汚れ始めたのだ。

「もう少しデソ」

イカ息子は顔をしかめながらもイカスミを吐き続ける。もちろんイカスミの色は真白である。

お偉さんは、顔までもがベトベトになっていく。

だが、それでも歩みを止めない。何処か慣れている？そんな感じさえるのである。

「しぶといでデソ、それに、それにスタイルがいいデソ、女性デソ

「？」

イカ息子はその時、自分に向かって歩み寄る人間が女性であることに気付いた。

流石のイカ息子も、スタイルの良い女性と分かり、怯みそうになる。

その時。

彼女が口を開いた。

「もう、無益な戦いは止め、話し合いましょう」

女性が大きな声を張り上げる。張りがあり良く通る声だ。

「信用出来ないデソ！」

イカ息子が叫ぶ。が、彼女は歩みを止めないでさらに近づいてくる。

手には何の武器も持っていない。

彼女との距離が近づくにつれ、白く汚れた顔の下の本当の容姿が分ってくる。

「熟女デソ。奇麗デソ……」

元来、半イカ族は熟女好きである。

「私たちは、今、君達の立っている所から先は埋め立てを中止します。だから、これ以上作業の妨害をしないで欲しい」

彼女は悲痛な顔でそう言った。

その表情がイカ息子達の心に響いてくる。

確かに、既に埋め立てられたところは取り返しがつかない。これ

以上の埋め立てをしないのであれば、それがベストである。

後は、信用出来るかが問題だ・・・。

「みんな、吐くのを止めるで、デソ」

彼らは息が荒く疲労しきってはいたが、美しい彼女の姿を前に心が盛り上がっていたところであった。

こんな時、彼らは本能から、白色のイカスミの生産能力は莫大に増していく。

だが、それは彼らに取って、致命的な体力を消耗することとなるのだ。

このまま本能のままに白スミを吐き続けることは、とても危険なのであった。

彼らは、止む無く白スミを吐くのを止めた。身体はむずむずするのだが、ここは堪えた。

「本当にデソか？」

イカ息子が尋ねる。

「本当よ」

彼女の浮かべるアヒル口の笑みは素敵だった。余りにも素敵だった。

それを見たイカ息子は、彼女の言葉に嘘はないと思った。こんな人が嘘を吐く訳がないと思った。

イカ息子は彼女を信じることに決め、そして、イカ息子も彼女に向って一歩前に進み出た。

彼女はイカ息子の前まで来ると、そっと右手を差し出した。

「約束」

そう言って……。

彼女の言葉は先程までの張りのある声とは違って、どこか艶のある日常の声だった。

イカ息子は、慌てて効き触手で彼女の右手を握ろうとしたのだが、
「汚れているでデソ」

その触手は激しい戦いにより余りにも汚れていた。

彼は慌てて、効き触手を残りの触手に擦りつけ汚れを落としのだったが、余りにも慌てた為に、あらぬ触手に摩擦を与えてしまった。

「うっ！」

その触手は、彼の意志に反して彼女の右手に向って伸びて行く。

（ま、拙いでデソ！）

効き触手を伸ばさずに、出してはいけない触手を伸ばしてしまった。

しかし、彼女にはその区別がつかない。

彼女は嬉しそうに、ニツコリと笑って、

「仲良く、共存しましょう」

そう言い、その触手を固く握った。

すると、

「デ、デソー！！」

イカ息子は高らかにそう叫ぶと、慌てて彼女から砲口を逸らし、空に向って空砲を放った。

もう、彼の体内には一滴のイカスミも残ってはいなかった。

彼はその場に、そのまま倒れてしまった。

そして・・・。

干潟の残りの半分は守られたのだ。

イカ息子を始めとする、彼ら半イカ族の活躍により守られたのだ。

干潟の生き物達の生活、干潟を愛する者達の想いは、ここに守られたのである。

そして、忘れてはならないのは、全てを背負う覚悟の元に下した、彼女の多大なる決断である・・・。

<おしまい>

(後書き)

決断力は日々の積み重ねが大事でデソ。
急に決断出来る様にはならないでデソ。

” 侵略！イカ娘 ” 二期、始まったでデソ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8106r/>

侵略！（されそう）イカ息子

2011年11月16日02時25分発行